
この腕時計は時間を合わせてくれない

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この腕時計は時間を合わせてくれない

【Nコード】

N6421W

【作者名】

ケセラランパセラ

【あらすじ】

主人公時島正午はたまたま見つけた怪しい骨董品店で奇妙なデザインの腕時計を買い受ける。しかしこの時彼はまだ知らなかった。これをきっかけに彼の平穏な生活がとんでもないことになっていくことを……

狂い始める時間（前書き）

はじめまして。小説初投稿になります。ケセランパセランと申します。ど素人なので文章力もなければきちんとした表現力もありません。本当にグダグダな作品ですがそれでもいいよと思いつながら読んでいただけるとうれしいです。よろしくお願いします。

狂い始める時間

僕こと時島正午は今日この日ときしましょうじゅうがくるのを楽しみに待っていた。なぜかって？なぜならば今日は、そう給料日！一ヶ月に一度くる僕にとって一番楽しみな日だった。そして給料が振り込まれていることを確認した僕のテンションは今最高潮になっていた。

「さあて、何買おうかなあ」

とりあえず街に出てみたものの何も決めずに出てきてしまったのでとりあえずぶらぶらしている。しばらく歩いているとある店が目についた。

「こんなところにこんな店あったんだ」

少し古びた感じのこれは骨董品？の店だろうか。店先には見たこともない置物や明らかに異国のものであるう怪しい商品が並んでいた。「なんだこれ、何に使うんだろう？」

それを見た僕は少し興味を引かれたので店の中に入ってみることにした。中に入るとますます怪しい雰囲気になっていった。何だか異世界にでも迷い込んだ気分だ。一通り店の中を見ていくとあるものが目に入った。それは、なんとも奇妙で独特なデザインが施された腕時計だった。ベルトの部分には見たこともない古代文字？のようなものが描かれており時刻を表す画面の部分は鈍い金色に光っていた。

「うわあ・・・すごいデザインだなこれ」

そう言いつつ手にとって見る。やっぱり何度見てもすごいデザインだった。そう思いつつしばらく眺めていると

「お気に召しましたかな？」

と突然後ろから声をかけられた。

「のわああああああ！」

突然後ろから声をかけられた僕はびっくりして飛び上がりそうになった。慌てて振り返るとそこには自分の背丈の半分ほどしか身長が

ないおばあちゃんが立っていた。

「おやおや、そんなに驚かんでもいいじゃろうが」

「あ、すいません」

あれ？何で俺謝ってるんだ？と思いつつも思わず謝ってしまった。

それにしてもこのおばあちゃんはいつからここにいたんだ？そんなことを考えていると

「その時計がおきに召しましたかな？」

とふいに僕が手に持っているものを指差しておばあちゃんが言った。

「ああ、いやすごいデザインだなあと思いました」

「そうじゃな、確かにすごい絵柄じゃな。じゃけどその時計は普通の時計とは少し違うものでな。それ故にそういった独特な絵柄になつとるんじゃよ」

「へえーそうなんですか」

確かにデザインは普通じゃないけどそれ以外にどこが違うのだろう。まじまじと見つめてみる。

その様子をみていたおばあちゃんがにつこり笑って僕にこう言ってきた。

「お前さんその時計気に入ったんならやろうか？」

「え！そんないいんですか？」

「ああええよその代わり大事に使ってやっておくれ。少々わがままな子じゃがあんたなら大丈夫じゃろう」

は？何を言ってるんだこのおばあちゃん。時計がわがままってどういうことだ？

意味不明な言葉を残しておばあちゃんは店の奥の方に消えていこうとしていた。最後にこちらの方に振り返って「それじゃ元気だな」と言われた。

思わぬ展開にポカーンとしてしまった。とりあえず店を出てからもう一度腕時計に目をやる。

「ま、まあ貰えたんだしとりあえずよしとするか。」

無理やり自分を納得させて腕時計をポケットにしまい今日はもう家

に帰ることにした。

そして、僕はまだこの時知らなかった。これからまさかあんなことがおきるなんて……

巻き戻される時間（前書き）

この辺から主人公の周りで異変がおき始めます。そして今回もグダグダです。すいません（泣）

巻き戻される時間

次の日、朝起きてからすぐに会社に行くための支度を始める。適当に朝食を作りそれをサツと食べ終えた後、着慣れたスーツに着替えて家を出ようとしたがそこであることに気づいた。

「おっと腕時計するの忘れてた」

慌てて部屋に戻り腕時計を探す。しかし

「あれ、おかしいないつもここに置いてるはずなのに・・・」

部屋の中をいくら探しても時計が見当たらない。時間にさほど余裕があるわけでもないので慌てながらももう一度よく部屋の中を探す。その時あるものが目に入った。それは昨日あの店でもらった奇妙なデザインの腕時計だった。

「さすがにこれをしていくのはなあ・・・」

どうしようかと悩んでいたが時計に表示されている時刻を見るともう家を出ないと会社に遅刻してしまう時間だった。

「うわ！！もうこんな時間！！しょうがない今日だけこの時計をしていくか」

腕時計をすばやく身につけて大急ぎで家を出る。

「だああああ！！お願いだから電車に間に合いますように！！」

いつもなら歩いて駅まで向かうはずなのだが今日は時間に余裕がないのでダッシュで駅を目指す。途中何度か信号につかまりそうになったが今日は運がいいのかスムーズに駅までたどり着くことができた。

「よし！！これなら間に合う」

そのまま改札をくぐろうとしたが

「ピンポン。チャージ金額が足りません。」

という無機質な機械音とともに目の前をバリケードに塞がれてしまった。

「な！嘘だろ！」

もう一度やってみたがやはり結果は同じであった。仕方なく切符売り場に向かい慌ててカードに現金をチャージしようとしたその時

「線ドアがしまりまーす。ご注意ください」

というアナウンスがながれてきた。

「ぬあああああああああ！待って！待って！待って！！！」

チャージが終わったカードを急いで引き抜き改札をくぐる。死に物狂いでホームを目指したが、時すでに遅し。目の前で扉が閉まる。

そしてそのまま電車が発車した。

「う、嘘だろお〜・・・」

その場で大きくうなだれる。

「このままじゃ会社に遅刻しちゃうよ・・・(泣)」

はあく大きくため息をつきどうしようかと考える。

「あくせめて後1分時間があれば間に合ったのに・・・はあく時間戻らないかなあー」

そんなことを言いながら今日はじめて着けてきたあの奇妙な腕時計を見る。

あれ？そこで僕は気づいた。時計の針が止まっている。もう一度よく見たがやはり針が動いていない。

「あらら、もう壊れたのかなあー。はあく」

思わずまたため息をつく。今日についてはないなあーと思いつつトボトボとホームを歩いているとまたもや彼は違和感を感じた。静か過ぎる。そうあまりにも自分の周囲が静かだったのだ。人の話し声も車の走る音も誰かが歩いている時に聞こえる足音も何も聞こえない。「？」

思わず周囲を見回す。そして彼は自分が見ている光景に思わず息をのんだ。

「なんだ・・・これ・・・」

みんな止まっている。まるで時間が止まったかのようにピタッと動きを止めているのだ。

「どうなってるとんだ・・・夢でも見ているのか」

自分の頬をつまんでみた。痛い、これは夢なんかじゃないということとを認識する。そんなことをしていたとき突然グラツと目眩がした。おもわず壁に手をつく。

「うっ！！なんだ頭が痛い」

何が起こっているのか理解できないままひたすら痛みに耐える。しばらくするとだんだん痛みが引いてきた。落ち着いてきた頃に腕時計を見てみる。針は止まっているはずだったのだがよく見ると少しばかり時間が戻っていた。その時刻はちょうど電車がホームに来る少し前の時間だった。

「完璧に壊れてるなこりゃ」

そう思っていたとき

「うわ！？なんだこりゃ！！」

突然時計が光り始めたのである。その異様な光景に驚いているとさらにおかしなことが起きはじめた。周囲の光景がまるで逆再生でもしているかのように動き始めたのである。啞然としながらその光景を見ているとさつき行ってしまったはずの電車がホームに戻ってきた。そして電車の扉が開いたところで時計の光が消えた。消えたと同時に腕時計の針がまた一定のリズムを刻みながら進みはじめた。

「線ドアがしまりまーす。ご注意ください」

ふいにそんなアナウンスがながれはじめた。ハッとなって急いで電車に乗る。ドアが閉まり電車が発車した。電車の中で僕は腕時計を見つめた。

「この時計一体どうなってるんだ？さっきのは一体？」

その日、僕の頭の中は一日中そのことについていっばいになるのだった。

出会いの時間（前書き）

新キャラ登場！！幼女！幼女！幼（ry・すいません調子に乗り
ました。そして相変わらずグダグダです（泣）

出会いの時間

「はあ．．．」

ため息をつきながら会社を出る。時刻は夜の9時をまわっていた。今日自分の身に起きたことがいまだに信じられず一日中考えごとをしていたら見事に仕事が遅れ結果残業をするはめになってしまったにしてもだ、本当に今日のあれはいつたい何だったんだ？自分の周りの時間が止まり挙句の果てには巻き戻るなんて普通じゃありえないことだ。しかし現にそれが目の前で起きた。その証拠に会社にも遅刻しなかった訳だし。

「はあ」とにかく家に帰ろう。ゆっくり風呂に入って今日はさっさと寝よう」

そんな独り言を言いながら僕は家路についた。駅からしばらく歩いていくと自分の家が見えてきた。やはり自分の家が一番ということなのだろうか急に気持ちがりラックスモードに切り替わった気がした。

「やっぱり家がいちば．．．ん？」
あれ？そこで僕は違和感を感じた。自分の部屋の電気がついているのだ。朝家を出た時にきちんと確認したはずなのに消し忘れていたのだろうか。不思議に思いながら玄関の前まで来たときさらにおかしなことに気づいた。部屋の中から音がする。何かを探しているようなガサゴソした感じの音が。

「おいおい、まさかこれって．．．」
リラックスモードになっていた気持ちが一気に緊張する。
「もしかしてこれ空き巣ってやつか？」

どうしよう。警察に連絡するべきか。いや、でもあまり大事にしない方がいいなあ。うーん．．．とりあえず家に突入するべきかな？このままじゃ何されるか分からないし。

「よし！」

「まったく何を言っているのか分からない。腕時計？化身？意味がわからああああん。」

「どっなってるのおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおー！」

僕はどうしていいか分からずにひたすら叫びつづけた。そしてここから僕の平和な日常はとんでもないことになっていくのであった。

操られる時間（前書き）

時間を自由に操れるっていいですね。うづやまじいー・・・

操られる時間

前回のあらすじ

家に帰ってきたら見知らぬ少女がお菓子を食い漁ってました。めでたしめでたし。

「って全然めでたくねえよ！！何一つ解決してないよ！！ってかあらすじ短っ！！作者やる気出せよ！」

まったく一体何なんだ今日は。朝、変な体験をして一日中悩まされたかと思えば今度は家に謎の少女だと！もう一度言おう少女だと！（大事なことなので2回言いました）あつなぜ2回言ったのかというと家にいたのが少女だったということ強調するためであって決して僕はロリコンなどではない。うん、決して。とにかくだなぜ人の家に勝手にあがりこみお菓子をポリポリと食べてるんだこの女の子は。

「・・・・・・・・・・」

「ポリポリムシヤムシヤ」

はあ・・・・・・・・とりあえず落ち着こう。頭を冷やして冷静になるんだ僕。とりあえず現状把握だ。まずこの女の子は誰なのか。そしてどうやってこの部屋に入ったのか。そもそも部屋には鍵をかけていたはずなのだから入ることなんて不可能なはずなのに・・

「うー・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・ん？」

頭の中で色々考えていたらふいに背中の方で違和感を感じた。振り返ってみるとそこには例の女の子がいた。お菓子で汚れた手で服をつかんでクイクイと引っ張っている。

「な、何？どうしたの？」

「あるじ、もつとお菓子食べたい」

「・・・・・・・・・・へ？」

よく見ると女の子は空になったお菓子の袋を持っていた。さらに後ろには空になったお菓子の袋が山になっていた。って全部食べたの

かよ！

「・・・・・・・・・・はあ〜」

まったく一体何者なんだよ本当に・・・とりあえず

「あのさ、君どこから来たの？名前は？お母さんとお父さんは？」
これくらいは必要最低限質問しておくべきであろう。

「私の名前はクレム、さっき言ったと通りあるじがしているその腕時計の化身・・・あるじが私をもらってくれたからこっちの世界にでてくることができた・・・」

うん、なるほどさっぱり分からん！だから化身ってなんだ。今の質問で得られた情報この女の子がクレムって名前だっただけじゃん。

「あ、あのさクレムちゃんだっけ？さっきから言ってるその化身ってのは・・・」

「そのままの意味・・・その腕時計に宿ってた・・・」
宿ってた？これに？僕は左腕にしている時計に目をやった。奇妙なデザインで怪しげな骨董品屋でもらったこの時計から出てきたって？どこのファンタジーだよそれ。そんなこと思っているとまた服をクイクイと引っ張られた。

「ねえあるじこのお菓子どこで売ってるの？」

「え？あ、あぁーこれは夏限定の商品だからもう売ってないよ」
もう10月半ばの季節に夏限定はさすがに無いだろう。

「！？」

いやそんな世界が終わるみたいな顔しなくても。よほど気に入ったのだろうか。

「・・・・・・・・・・それなら」

そう言っただけにやらブツブツと呪文のような言葉を唱え始めた。

「な、何やってんの？」

聞いてみたが反応は無い。どうやら集中しているようだ。仕方なくその様子を見てみると

「あれ？あ、痛っ！な、何だ！」

突然ひどい頭痛が襲ってきた。あれなんかデジャブ。こんなこと今朝もあつたような・・僕の記憶が正しければこの後

「うわ!?!」

予想通り腕時計が光った。これってまさか!?!また同じことが起るのか!?!そう思っていたが

「あれ?何か今朝より腕時計が光ってるんですけど!?!」

あまりの眩しさに思わず目をつむる。頭痛もひどくなってきた。

「一体何なんだよ!?!」

何がおきているのか訳が分からず僕はひたすら眩しさと頭の痛みに耐え続けた。しばらくするとだんだん光の強さが弱まってきた。頭痛も少しずつ治まってきた。

「はあーはあー・・一体何が」

「これで大丈夫なの」

ふいにブツブツ何か唱えていたクレムちゃんがそう言った。何が大丈夫なのかさっぱり分からなかったが。

「一体何したんだ?」

「これでまたあのお菓子が食べられるの」

はい?何言ってるんだ。

「だからねクレムちゃんあのお菓子は夏限定のやつでねもう売って・
」

ミンミンミンミンミン

へ?今変な音がしたような・・しかもなんか暑いし・・ま、まさかね・・

僕は恐る恐るカーテンを開けてみた。

「うわ!まぶしっ」

今の時間ではありえない光の眩しさが襲ってきた。そして外からはミンミンという音。空は雲ひとつ無い青空。こ、これって・・僕は慌ててテレビをつける。ちょうど天気予報がやってた。

「今日は夏らしい厳しい暑さとなりそうです。紫外線対策や熱中症対策を怠らないようにしましょう」

と美人なお天気キャスターが爽やかな笑顔で言っている。
紫外線？熱中症？今の季節には不釣合いな言葉に違和感MAXであ
った。

「も、もしかして・・・これクレムちゃんがやったの？」

「私以外に誰がいるのです。夏限定ならば時間を夏まで戻せばいい
のです。まったく我ながらナイスアイディアなのです」
ちよつと待て。いま何ていった時間を夏まで戻す？

「戻せばってどういうこと？まさか今の季節って・・・」

「もちろん夏なのです」

ああーなるほど夏限定のお菓子を買ったために時間を夏まで戻したの
か。あるあ・・・ねえーよ!!!

「はああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

何か僕夏まで戻ってきたみたいです。

繰り返される時間（前書き）

僕は夏より冬派です。どつどもいいです。ねすいません。

繰り返される時間

「な、なんてこった・・・」

本当に時間が戻ったのか。しかも夏まで。部屋を見渡してみるとカレンダーは7月になっていた。

「マ、マジかよ・・・俺はもう一度夏をエンジョイしなければならぬのか」

いや実際エンジョイなんかしてないけどね。むしろ仕事で暑い中歩き回ってたけどね。まあそんなことは置いといてだ・・・

「あるじ、早くお菓子を買ってくるの！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やっぱりこの子がやったのか。時間を戻したって言うってたし。でもどうやって？

「あ、あのさこれ君がやったんだよね。どうやったの？」

「んーと時間の構造を元から捻じ曲げてそれから・・・」

うん、ぜんぜんわからん！わかってたけど無茶苦茶すぎるわ！ドラ

えんか！

「と、とにかく早く時間を戻してよ。もういちど夏を過ごすなんてごめんだからな」

「お菓子買ってきてくれたら元に戻してあげるの」

ぐう・・・し、仕方ないお菓子買ってきたら時間を戻してくれるといってるしさっさと買ってくるしかないか。

「わかった今から買ってくるから少し待ってな。けれど買ってきたら時間戻してよ」

「わかったから早くいってくるの」

くううつうつうつうなぜだ、なぜ俺が買いつ走りに行かなければならないんだ。人の家に勝手に上がりこんでお菓子食ってるやつのため。

「はあ・・・じゃあいつてきます」

「あ、あるじ」

「?何」

「言い忘れてたけど一個じゃなくて十個買ってきてほしいの」

「はあああああああああ!」

この野郎どこまで図々しいんだ!。つてかごんだけ食うんだよ!

「一個じゃだめなの?」

「だめなの」

ちくしょおおおおおおお!こんな理不尽が許されるのか。

「わ、わかったよ・・・行ってきます」

「行ってこーいな」

・・・・・・はあ~~~~~~~~。思いっきりため息を吐きながら外に出る。

「ああ・・・暑い・・・」

部屋にあつた夏服に適当に着替えてから出てきたがやはり暑い。日差しが痛い。紫外線が、紫外線があああああ。しばらく歩いていくとスーパーが見えてきた。中に入ると

「ああ~~~~生き返る~~~~」

クーラー涼しい。つい三ヶ月くらい前にも同じ経験をしているのだけれどやはりこの瞬間は同じこと考えるんだな。そんなことよりさっさとお菓子を買って帰るぞ。

「え〜と・・・あ、あつた!」

夏限定と大きな文字で書かれたお菓子のコーナーを発見。

「えつと十個だよな。まったく本当にどんだけ食うんだよ」

とりあえずかごにぶち込んでさっさと会計をすませる。さっさと家に帰ろう。そんでもってさっさと時間を戻してもらわねば。スーパーから出て自宅に向かう。その途中で薄着のナイスバディな外人さんとすれ違った。まさにボン、キュツ、ボンな感じの。まあ夏も悪いことばかりじゃないよね、うん。

「ただいまあ〜あちい〜」

しばらくして自宅に帰ってきた。

「あ、あるじお帰り」

「ほら買ってきたぞ」

お菓子の詰め込まれた袋を渡す。するとクレムちゃん表情が一気に明るくなった。

「ありがとうなの。ボリボリムシャムシャ」

食うのはやっ！ったく・・・しょうがない子だよホント。そんなこと思いながら僕は少しの間彼女を眺めてみた。色々あって気ずかなかつたけどよくみるとこの子綺麗な顔立ちしてるよなあ。髪もきれいな金色に輝いてるし、瞳も透き通った綺麗な海を彷彿とさせる青色をしていた。彼女の服のいたるところには時計の針をモチーフにしたようなアクセサリーがついている。少なくとも日本人に見えるようなカツコウではなかった。やっぱりこの時計の化身ということなのだろうか。

「じーーーーー」

「ん？」

何か知らないうちにじーっと思つめられていた。

「あるじもお菓子食べたいの？」

「へ？」

「少しなら分けてあげるの・・・はい」

ずいっとお菓子の袋を突き出してきた。

「あ、ありがとう」

じゃあすこしだけ、ボリボリ。最近お菓子を食べてなかったがやっぱり美味しいもんだな。

「あ、ところでさ時間早く戻してよ。約束したでしょ」

「そんなに元に戻してほしいの？」

当たり前だこんな急に時間を戻されても困る。仕事もあるし。

「わかったの。しょうがないから戻してあげるの」

しょうがないからってところが引つかかるがまあいいだろう。とにかくこれでもとの生活に戻るわけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？どうしたの？早く戻してよ」

「お願いしますは？」

「・・・・・・・・・・・はい？」

「お願いしますクレム様時間を戻してくださって言ったら戻してあげるの」

「・・・・・・・・ん？空耳かな？今この子なんて言った？クレム様？お願いします？」

「え、ごめんよく聞こえなかつただけでなんて？」

「だから、お願いしますクレム様時間を戻してくださいって言ったら時間を戻してあげるの」

な、なななななななななななななななななな

「なんでじゃあああああああああああ！！！！」

意味がわからん！！何でそんなこと言わなければならんだああああああ！！

「ちよつと待つてよ！何それ！何でそんなこと言わなきゃいけないんだよ！」

「嫌なら別にいいの。そのかわり時間は元に戻さないけどそれでもいいのなの？」

こ、こんの野郎なぐりてえええええええええええ。そんな時俺の記憶である言葉が思い出された。

「少々わがままな子じゃがあんたなら大丈夫じゃろう」

はっ！まさかあの時あのおばあちゃんが言ってたわがままな子ってこういうことだったのか。

「さあどうするの？」

くっ・・・・・・・・この際時間が戻るならこれくらい我慢するべきなのだろうか。だけどこれを言ったら僕のなかで何かが崩れそうな気がする。

「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ」

しかしこのまま悩んでたって何も始まらない。ここは僕が折れるし

かないか……。

「……お願いしますクレム様時間を戻してください」

「ん〜よく聞こえないの。もっと大きな声で言うのなの」

「くっ……お、お願いしますクレム様時間を戻してください!!」

「うむ、よく言えましたなの」

その瞬間クレムちゃんが何かを唱え始めた。そしてあの時のように腕時計が光始める

「あ痛っ!!」

そんでもってまた頭痛が襲ってきた。しばらくすると時計の光と頭痛が治まって意識がはつきりしてきた。

「うう〜……も、戻ったのか?」

部屋を見渡しカレンダーを見てみる。ページは十月になっていた。

外の様子も蝉も鳴いてないしまぶしすぎる日差しもなくなっていた。

「戻ってこれたんだ……」

「これで満足なの?」

ふいにクレムちゃんに話しかけられた。

「あ、ああ満足だよ」

「そうなの。まああるじが私にお願いしますクレム様なんて言うまで戻りたかったじかんだものね〜」

!? そうでした僕はそんなこと言ったんです……

「はあ〜……」

「まあまあ元氣出してなの。このことは誰のも言わないようにするから安心するの」

ニヤニヤしながらいうんじゃないよ!

「とにかくこれからもよろしくなのあるじ」

「これからもって……はあ〜〜〜」

僕この先どうなるんだろうか。そんな不安を抱きつつ僕は思い切りため息を吐いた。

遡る時間 前編（前書き）

・・・はっ！

クレム「あっ、作者が生き返ったなの」

時島「え！？作者死んでたの！」

というわけでひさしぶりに更新でございます。そしていつも以上にグダってます。申し訳ございません・・・ぐはっ！！（書ききる気力が無くて前編、後編に分けましたorz）

しばらくして頭痛が治まり時計の光がおさまった。俺は恐る恐る目を開けて周りを確認してみた。壁にかけてあるデジタル時計が示す時刻は・・・

「よ、夜の10時・・・」

「ぐうー・・・すぴー・・・」

・・・おいおいそんなのありか。眠いから時間を夜にするとか本当になんでもありなのかこの子は。確かに眠いときにはまだ朝が来なければいいのと思うことはあるけれども。無茶苦茶にも程があるぞ。

「はあーこうなったら仕方ないか」

まあとりあえず俺が今すべきことは一つ

「ふううー・・・」

俺はゆっくりと息を吐いてクレムちゃんの頭に狙いを定めた。そして腕にある程度の力をこめて

「起きんかくらあああああああああああ！！！！」

懇親のチョップを振り下ろした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「まったく、あそこまですることないじゃないなの」

軽く腫れた頭をさすりながらクレムちゃんが少し不機嫌そうな顔で言ってくる。

あの後クレムちゃんはようやく完全に目を覚まし時間もすぐに元に戻させた。けれどもよほど痛かったのかずつと機嫌が悪い。

「悪かったって。こんどおいしいお菓子買ってきてあげるから、な？」

「一個じゃすまないの。たくさんお菓子を買ってきてくれるなら許すなの」

「わ、わかった。たくさん買ってやるから」

「じゃあ許してあげるの。けど絶対に忘れちゃだめなのよ。忘れたら時間を原始時代まで戻してやるの」

「はい絶対に忘れません！」

原始時代とか恐ろしいわ！それだけは絶対に回避しなければ。まあそんなこんなでとりあえずクレムちゃんの機嫌は直ったようだった。はあく朝からなんか疲れた。

せつかくの休日なのになんでこんなに疲れなくちゃならんだ。そんなこと思っていたときだった

ピンポン

「ん？誰だ？」

誰か来たようである。軽く身なりを整えてから玄関を開けると

「おはようございます。時島さん」

そこにいたのはとてつもなく綺麗なおねえさんだった。整った顔立ち、すらっと伸びた背、そして見事なプロポーション。まるでモデル雑誌に載っているモデルさんのようなおしゃれな服を着て俺にまぶしいほどの笑顔を向けているこの人はお隣に住む、深夜 恵（ふかや めぐみ）さん。

俺の憧れの女性であった。

「お、おおおおおおおはようございます！！！」

突然の出来事に動揺しまくる。まさか彼女のほうから家に訪ねてくるなんて思ってもみなかった。

「すいません。こんな朝からお尋ねしてしまつて」

「い、いいいいいいいえ！！全然問題ないです！はい！」

おいおい何だこのテンションのあたりようは！俺の頭の中では軽い祭りがおきてるぞ。

「そ、そそそそそそれでどうなされましたか？」

「あ、いえ実は昨日の夜時島さんこの辺で変な人見かけませんでしたか？」

「へ、変な人というのは？」

「それが・・あまりこういうことは言いたくないのですけれども最近誰かが私のことをつけてくるというか何だかずっと見られているような気がして」

「え、それつてもしかしてストーカーみたいなことですか？」
確かにこんな美人な女の人ならストーカーの一人や二人いるかもし
れないなあ。

「ええ・・・それに昨日郵便受けにこんな手紙まで入っていて・・・」
そういつて差し出された手紙を読んでみる。

「なんだこりゃ」

その手紙には一言こう書かれていた

「君は僕だけのものだ」

「私怖くて。だから時島さんお隣ですし誰か変な人見かけてないか
と思ひまして。」

「いやあー。昨日はちょっと疲れちゃっててすぐに寝ちゃったんで
わからないですねえー」

「そうですか・・・」

「警察とかには連絡したんですか？」

「ええ、一応。そしたら近辺のパトロールを強化してくれると仰っ
てましたけど」

ふううむ・・・これは心配だなあ。もし深夜さんの身に何かあったら
大変だし。

「とりあえず、俺も周りに気をつけてみます。あと何か困ったこと
があったら遠慮なく言ってください」

「ええ、ありがとうございます」

そう言つて彼女が微笑む。うおっ！まぶしい！まぶしいぜ！！

「それじゃあすいませんがよろしくお願いしますね」

そう言つて彼女は自分の部屋に戻つていった。

「うーん、ストーカーかあ・・・」

やっぱりいるんだなあ。いつの時代にも。

「にしても昨日の夜かあ・・・あ！！」

そうだこんな時にこそあの子の出番じゃないか。

「クレムちゃん！！」

「ど、どうしたの？何テンションあがってるの」

「時間を昨日の夜まで戻してくれ」

「へ？」

クレムちゃんはポカーンとしている。いつもは時間を戻せとうるさい俺からそんな言葉がでるとは思はなかったのだろう。

「でもさつきは夜に時間戻したら怒ってたじゃないの」

「事情が変わったんだ。とりあえず夜まで時間を戻してくれ。早急にそして的確に」

「だが断る」

「なんで!？」

「なんだかこき使われてるみたいで嫌なの。それに人をお願いするときはそれなりの態度つてもんがあるのなの」

「お願いしますクレム様。どうか時間を夜まで戻してくださいませ」

「あるじ、本当にどうしたの？」

ふっ・・・この際プライドなんて捨ててやる。もしこれで彼女を狙うストーカーを捕まえられたら高感度アップ間違いなし!下手すりやお礼にあんなことやこんなこともできるかもしれないし・・・

「なんか、あるじ気持ち悪いの」

「気持ち悪いとはなにかぁー!」

とにかく・・・

「お菓子でも何でも好きなもの買ってきてやるからお願い!」

「うーん・・・そこまでいうならわかったなの」

っじゃああああ!」

「それじゃあさっそくいくの」

そしてクレムちゃんが呪文のようなものを唱え始めた。しばらくして「イタツ!」

頭痛が走り、時計が光る。なんだかすっかり慣れてきた一連の流れを終えてから時間を確認する。時刻は夜の19時。

「よし、それじゃあいつちよやりますかぁー!」

「何をなの？」

こうして俺とクレムちゃんのストーカー退治が幕をあげた。

遡る時間 後編(前書き)

グダグダ更新再開です。よろしくお願ひします。

遡る時間 後編

「クレムちゃんとりあえず作戦会議だ!!」

「だから一体何をするきなの？」

「ストーリーを捕まえるんだよ」

「ストーリー？」

クレムちゃんの頭からクエスチョンマークがでていた。クレムちゃんはストーリーカーという存在を知らないようだった。うーんいちいち説明するのもめんどくさいしどう説明するかな。

「うーんと、とにかく悪党退治をするってことだよ。そのストーリーのせいで家のお隣さんが困っているから助けてあげるんだ」

とりあえず適当に説明してみた。するとクレムちゃんはなぜだか目をキラキラさせていた。

「悪党退治！なんかかっこいいの！」

どうやらうまくやりこめたようだ。なんだかんだいってこいつもまだまだ子供ってことが。

「だろ？だからこれからそのための作戦会議をするのさ」

「わかったなの！」

クレムちゃんもやる気が出てきたところで本格的に作戦会議を始めることにした。

「よし、ではまずこれから起こることを説明しよう。今からお隣さんの家にストーリーカーがやってくる。そしてそいつは手紙を残してどっかに行っちゃう。だからそいつがどっかに行っちゃう前にそいつをとっ捕まえて俺の好感度をUPさせ・・・」

「ん？好感度？」

「ゲフンゲフン！じゃなくてお隣さんを助けてあげようということなのですよ」

「なるほど、とにかくそいつを捕まえればいいということなのね」

「そういうこと」

まあ、そういうことなのだけれどストーカーなんてそう簡単には捕まえられないだろう。もし危ないやつならこちらにも何か危害が及ぶかもしれないわけだし。どうしたもんかねえ。

「で、作戦って具体的にどうするきなの？」

「それを決めるための会議さ。つってもノープランだけど」

「うーんとうなりとりあえず何かいい案は無いかと考える。クレムちゃんもなにか考えているようだった。

その時だった。

「……ん？あれ？」

家の前の廊下からなにやら足音が聞こえてきた。深夜さんかと思っただがその足音は女の人のものとは思えないくらい大きな音だった。その足音はこっちに向かって歩いてきている。しばらくしてその足音が止まった。しかもちようどお隣の深夜さんの家の前で。

「え！嘘もう来たの！？」

俺は慌てて玄関を開けた。廊下に出て深夜さんの家のほうを見た俺は思わず叫び声をあげた。

そこにいたのは身長は2メートルを超えているであろう大きな男がいた。体つきもかなりよく筋肉がはちきれんばかりに露出していた。一瞬化け物でも見ているのかと錯覚するほどだった。

「主どうしたの！！」

クレムちゃんも廊下に出てきた。そこで男は慌てて逃げ出そうとしていた。

「あ、こら待て！！」

もうこうなったら！！

「作戦実行だー！！」

「え？作戦って？」

「正面突破ー！！！！」

「バカなの！？ここにバカがいたなの！？」

逃げる男に向かって全力でダッシュしながら俺はタツクルをかました。しかし俺みたいなの平凡な体つきの男のタツクルなんて効くわけ

もなく見事に跳ね返されてしまった。

「あふん・・・」

「ちよつ主!!」

だめだ。結局なにもできないままあの男を逃がしてしまうのか。そう思っであきらめようとしたときクレムちゃんが何か唱え始めた。

「え？イタツ!!」

そのときまた頭痛が起きて時計が光った。そして頭痛や光がおさまった時俺は周りの異変に気がついた。

「う・・・あれ？」

「主!!大丈夫なの？」

「あ、ああ何とか大丈夫。それより何やったの？」
するとクレムちゃんは得意げな顔で

「簡単なの。時間を止めてやったの」

・・・
あああああああああ!!その手があった!!てかなぜ早く気がつかなかった俺—————!!

「お、俺バカだった・・・」

「知ってるの(笑)」

ぐさっ・・・という音がどこから聞こえてきた気がした。

「うつつ・・・はっそれよりあの男を捕まえなきゃ!!」

とりあえず家にあつた荷縄とかガムテープやらで男の両腕と両足を縛っておいた。

「・・・こんなんで大丈夫なの？」

「大丈夫・・・だと・・・思う・・・よ」

本当はかなり不安だったがこれ以上どうしようもないのでとりあえずこれでよしとした。

「じゃあ、時間を動かすなの」

「お、おう」

クレムちゃんが何か唱え始めて一連の流れが終わりました時が動き始

めた。

「・・・ん？あれ・・・」

男が気づいたようだ。自分に何が起こったのか分からないようで混乱した表情をしていた。

「な、なんだこれ・・・どうなってるんだ!!」

男が急にもがき始めた。その光景はまさに捕らえられた猛獣が暴れているような感じだった。

「主、何だか怖いの」

クレムちゃんが俺の後ろで震えていた。

「だ、大丈夫だから・・・とりあえず、おい！あんた!!」

男に呼びかけると向こうはこちらに気づいたようだ。

「な、なんだあんた・・・これほどいてくれ!!」

「誰がほどくか！このストーカー野郎!!お前のせいで深夜さんが困ってるんだよ!!」

「ば、誰がストーカー野郎だ!!俺は純粋に俺の気持ちを伝えようと・・・」

「じゃあ、これはなんだよ」

俺は郵便受けに入っていた手紙を見せた。

「こ、これは・・・俺からのら、ラブレターだ!!」

「どこがだよ!!!これのどこにラブレター成分があるんだよ!!!」

「君は僕だけのものだ、なんてどういう感性してるんだよ!!!この男は!」

「う、うるせー!だいいちお前は何なんだ。彼女の知り合いなのか?」

「俺は深夜さんの隣に住んでるものだ。彼女に最近誰かにつけられるような気がするって相談されてたんだ」

俺が説明すると男は急にシユンとなった。うわ、強面の男がシユンとするのって何かキモイな。

「俺はただ彼女に声をかける勇気が無くて・・・それでいつかは声をかけてみようと思って後をつけたりしていたんだが・・・そうだよな

こんな男がついてきたらそう思うよな」

「わかってるならやめるよな」

「でもこのままだと絶対に後悔しそうな気がするんだ」

「……」

うーん・・なんとなくだがこの男が少し可愛そうに思えてきた。別に悪意があるわけではないみたいだし。

そう考えていたときクレムちゃんが俺の背中から少しだけ顔をだして男に向かってこう言った。

「男ならもつと堂々とするなの。ウジウジしてる男は嫌われる・・なの」

そういわれた男はまたさらにシユンとなってしまうた。

「そう言われても・・俺は臆病者だからな」

何だろこの時俺は少しこの男を応援したい気持ちになった。たしかにこいつがやったことは許せることではないが。

そう考えているとき廊下の向こう側から足音が聞こえてきた。そして見えてきたその人影は今まさに話題になっているその人だった。

「あら、時島さん。どうされたんですか？」

「ふ、深夜さん!!」

「!!!!!!」

「すごい綺麗な女のひとなの」

すごい状況になってしまった。ど、どうしよう。

「えーと、この状況はいつたいどういう・・」

「あ、いや深夜さんこの間誰かにつけられる気がするって言うってたじゃないですか。その犯人がこいつなんです」

「え？私そんな相談しましたっけ？」

あ、しまった。時間を戻してるからまだ俺は深夜さんに相談されてないんだった。

「と、とにかくこの男があなたのことをずっとつけてたみたいなんです」

「そうだったんですか・・」

深夜さんに見られて男は顔を伏せてしまった。顔はパツと見ただけでも分かるくらい真っ赤になっている。さすがに可哀想かもなあ。そう思っていたら

「あのね、お姉さんこの男の人が言いたいことがあるんだって」
クレムちゃんが深夜さんに向かってふいに言った。

「え？言いたいこと？」

クレムちゃんが男に近づいて縛っていた荷縄やガムテープをはずし始めた。

「男ならウジウジしないで言いたいこというの」

そう言われた男はしばらくクレムちゃんを見つめた後何かを決心したように頷くと立ち上がって深夜さんと正面から向かい合った。

俺はその光景を固唾を飲んで見守っていた。

「あ、あのー！」

「は、はい」

さすがにこんなにでかい男と真正面から向かい合ったら怖いのだろう。少し彼女の体は震えていた。

「こんなことして嫌な思いさせたことまず謝ります。すいませんでした。じ、実は俺あなたのこと一目見たときから気になってそれで・・・あの・・・」

男は大きく息を吸い込みそして

「よ、よろしければ俺とお付き合いたいだけないでしょうか！
！」

言ったー！ー！ー！ついに言いやがった！さあどうなる。どうなるんだ。俺的にはもちろんフラれてほしいのだが。っていうか今さら思いついたけどこれで成功したらどうしよう！

「え、えーと・・・その私」

おい、まさか！やめてくれー！ー！ー！

「ごめんなさい！ー！ー！」

「え・・・」

一瞬周りが静寂に包まれた。そして男はそれを聞いて何か吹っ切れ

たような表情をしていた。

「そう・・・ですか・・・」

「本当にごめんなさい」

「いえ・・・きちんと返事聞いただけで俺は満足です」

男はクレムちゃんに向かつて

「ありがとうなお譲ちゃん。おかげでなんかスッキリしたよ」

そういわれたクレムちゃんは少し頬を赤らめて照れたようにしていた。

「それじゃあ、俺行きます。今まで迷惑かけて本当にすみませんでした。」

深々と頭を下げた男は行ってしまった。

それを見送りながら俺のココロの中では

セーーーーーーフ!!!!!!!!危ねえ!!!!!!!!とにか

くよかった!

なんてこと思っていた。

「主、なんだか嬉しそうなの・・・」

「うえ!? そんなことないよ。ははははは」

とりあえず何とか解決かな。

「時島さん」

「は、はい!!」

「その、なんだかよく分からないですけど色々してくれてたみたい
でありがとうございます」

「い、いえこんなことくらい朝飯前ですよ。だはははははは」

「それで時島さん・・・あの・・・」

「は、はいなんでしょうか!!」

きたーーーー!!何だ!何が起きる!!あんなことか?こんなことか?もしかしたらさらにすごいことができたりしちゃうかも!!ふおおおおおおおお!!

「その・・・ですね・・・」

ドクンドクンドクンドクンドクンドクン!!!!

「……………この可愛い子なんですかあああああ……！」

「……………へ？」

「時島さんのお子さんですか？もうすごい可愛いわ……！」

「うにゅ！く、苦しいの……」

深夜さんがものすごい勢いでクレムちゃんをモフモフムギウムギウムギウムしている。

「あ、あの……深夜さん？」

「はっ！ごめんなさい。私……じ、実は小さい女の子が大好きなんです……！」

「……はい？な、何だこの展開は……俺の予想から大きくずれたぞ。」

「あなた、名前はなんていうの？」

「私の名前はクレムなの……むぎゅ……！」

「クレムちゃんって言うのね……！可愛いわ……！……！……！……！……！……！……！……！」

ムギウムギウムモフモフ。

「……………なぜだ。俺の予定ならばムギウムギウムモフモフしてもらうのは俺のはずだったのに。」

「あ……………あ……………」

ち、ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！

俺はクレムちゃんが深夜さんに可愛がられている光景を羨ましそうに見ていることしかできなかった。

ガクッ……………

置いてけぼりの時間（前書き）

なんとか8話目です。よろしく願いします。

「お留守番ってことは一人で家に居なきゃいけないってことだよね？」

「まあそうだよね」

「・・・やなの」

「はい？」

「一人ぼつちは嫌なの！！」

「うお！！」

「やだよ・・・一人になるのはもう嫌なの・・・」

クレムちゃんが泣きそうになりながら俺にしがみついてきた。

「え？ええええええ・・・」

予想外の反応にどうしていいか分からなくなる。

「く、クレムちゃんとかく落ち着いて」

とりあえず、なだめることにした。

しばらくして・・・

「大丈夫？」

「ぐすつ・・・うん・・・」

なんとか落ち着いたようだ。

にしても、まさかこんなことになるなんてな。正直かなりあせった。だってクレムちゃんがお菓子にまったく反応しないのでどうすればいいのかわからなかったんだもん。

「ねえ、クレムちゃん」

「スン・・・なに？」

「さっき言ってた、一人になるのはもう嫌、っていうのは？」

「！？そ、それは・・・」

顔を真っ赤にしてクレムちゃんがあたふたしている。あれ？なんかちょっと可愛いかも・・・

はっ！！ちがうちがうちがう！！そうじゃない！俺は決して口リコンではないぞ、うん！

「それは？」

「・・・主には言いたくないの」

「はあ？なんだそれ」

「と、とにかくなんでもないので！！」

うーん。この反応を見る限りだと過去に何かあったってことだろうか。まあ、けれども言いたくないって本人が言ってるんだしあまり詮索するのも可哀想かもな。

「わかった、とりあえずそのことは置いておくことにしよう。それよりも明日のことだよ。一緒に仕事場に連れて行くわけにもいかなしいし・・・」

「・・・・・・・・」

どうしたもんかな。

「やっぱりお留守番ってことになっちゃうのかなあ」

「ううう・・・ぐしゅ・・・」

また、クレムちゃんが泣きそうになっている。マジでどうしようか。そう考えているときだった

「ピンポーン」

「ん？誰だ？」

誰か来たようだ。軽く身なりを整えてから少しだけ玄関を開ける。

「はい、どちら様・・・」

「正午ーーーーー！！」

勢いよくドアの横側から誰かが飛び出してきた。そしてそのときになぜか俺の名前を叫んでいた。

「・・・・・・・・え？」

「え？じゃないわよ。反応薄いわねえ」

俺はその声になぜか聞き覚えがあった。それにこのやたらテンションの高そうな感じもなんとなく俺の知っている人に似ているような気がする。そして俺の予感は見事に的中した。そう、そこにいたのは

「ね、姉ちゃん！？」

「やつほー！久しぶり」

俺の姉こと「時島 朝日」（ときしま あさひ）だった。

「元気にしてたー？久しぶりにあんたの顔が見たくなってさー。来

「ぶにゃー!!!」

姉ちゃんがクレムちゃんを抱きしめた。

「ちよつと正午!!! なんなのこの子! あんたいつの間にか子供作ってたの?」

「・・・えーと」

「まあ、いいかそんなこと。にしても可愛いわー!!! お人形さんみたい!!!」

姉ちゃんに抱きつかれてクレムちゃんが苦しそうにバタバタしていた。

なんかこんな光景、昨日も見たような。

「あ、あははははは・・・はあ」

こうして俺の家に突如現れた俺の姉ちゃんまで加わり平和だった俺の生活はまたしても変な方向に向かうのであった。

「なんとかなる・・・かなあー?」

にぎやかな時間(前書き)

一人暮らしに憧れる。今日この頃・・・

「楽しむな！！つてか何ナチュラルに馴染んでるんだよ！！何しに来たんだよ姉ちゃん！」

「だから、さつきも言ったでしょ？久しぶりにあんたの顔が見たくなつて来ちゃったのよ」

「・・・絶対嘘だ。俺の姉は弟の顔が見たくなつてわざわざ会いに来るような人間ではない。」

「あ、そうだ旦那さんはどうしたんだよ？」

「それは・・・」

そう、うちの姉は最近結婚したばかりで新婚ホヤホヤ生活をしていたはずなのだ。

「それは？なんだよ」

「・・・」

「なあつてば」

「知らないわよ、あんなやつ」

「はい？」

「と、とにかく私しばらくはここに泊まるから」

「はああああああああああああああああ！！！」

何を言つとるんだこの人は！？

「いやいやいや！！そんな急に泊まるつていわれても」

「大丈夫よ。一応泊まる用意はしてきてるし、それにただで泊まるつもりじゃないわよ」

「は？どういうこと？」

「私があんたのために家事を全部やつてあげる。料理も、洗濯も、掃除も全部やつてあげる！」

「いや、それはありがたいけどさ・・・」

「でしょ！新婚ホヤホヤの奥さんの手料理が食べられるなんて幸せ者よ」

「それが実の姉じゃなければな」

「何よ」

「その作り声もやめろ、うざい」

「ねえ、主」

ふいにクレムちゃんが話しかけてきた。

「ん？何？」

「朝日はここに泊まるの？」

「あ、いや・・・」

「ちよつと正午！！」

「何だよ」

「あんだ、こんな可愛い子に主なんて呼ばせてるの！？」

「お、俺が呼ばせてるんじゃないやねえよ！この子が勝手に呼んでるんだよ」

「そ、そうなの？クレムちゃん」

「そうなの、主は私の主なの」

なんだかややこしいな。

「そ、そうだとしても主だなんてだめよ」

「そうなの？」

「そうよクレムちゃん。こいつのことは下僕なり犬なり好きに呼べばいいの」

「待てえええええええええええええええええええええええい！！」

俺の扱いひどすぎんだろ！！下僕もそうだけどまず犬ってなんだよ！！

「何よーいいじゃない。こんな可愛い子に犬って呼ばれるなんて何だか興奮するでしょ？」

「俺は、そんな特殊な趣味をしていない！！」

俺のことなんだと思ってるんだよ！

「じゃあ、せめて正午って呼び捨てていいじゃない。それくらいならいいでしょ？」

「ま、まあそのくらいならいいけど・・・」

もうこれ以上つかかると疲れそうなので俺が折れた。

「じゃあクレムちゃんこいつのことは今度から正午って呼んでね」

「わかったなの」

「はあ……」

何かもう色々とどうでもよくなってきた。

「正午」

いきなりクレムちゃんが俺のことを呼び捨てで呼んできた。

「な、何？」

うんやっぱりあの呼び方で慣れていただけに違和感がすごいな。

「私ね、朝日にここに泊まっていつてもらいたいの」

「へ？」

「クレムちゃん!？」

ギューーーーーー!!!!

「あ、朝日がいればある……じゃなくて正午が仕事に行っている間も一人じゃないし……」

そうなんだよな。俺もそれは考えていた。姉ちゃんがこの家に来てくれればクレムちゃんが一人で留守番をしていることもなくなる。そうなればさつきまでの悩みも全て解決なのだが……

「クレムちゃんお菓子好きなんだ。あら、これ美味しいわねポリポリムシヤムシヤ……」

「うん。このお菓子は私のおすすめなのポリポリムシヤムシヤ……」

…… (泣)

絶対になんかあるよ。不安しかねえよ。

「で、正午クレムちゃんもこう言ってることだし私がここに泊まることに異論はないわよね？」

「いいよね正午？」

「う、う……ん」

クレムちゃんの目がキラキラしながら俺を見つめている。それに便乗するかのよう姉ちゃんもキラキラした目で俺を見てきた。

キラキラキラキラキラキラキラキラ……

「だあ！もうわかったよ！！泊めればいいんだろ！泊めれば！」「もう、どうにでもなりやがれ！」

「やった〜！クレムちゃんこれからよろしくね！ついでに正午も」

「ついでかよ！！」

「うん。よろしくなの」

クレムちゃんが嬉しそうに笑っていた。

まあ、クレムちゃんもこれで一人で留守番することはなくなったわけだし

「まあ、いつか」

こうして俺の家に新たな住人が増えました。まったくどうなることやら・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6421w/>

この腕時計は時間を合わせてくれない

2011年11月30日23時56分発行